



令和7年度
公私幼保合同研究会まとめ

インクルーシブ保育 研究会



大阪市保育・幼児教育センター

ねらい・内容

<A:中堅以上(10年以上)クラス>

園内でインクルーシブ保育をすすめていくミドルリーダーとして、初任者の悩みに耳を傾けながら、保育環境や保育のあり方を考える

<B:初任者(2~5年目ぐらい)クラス>

表に見える子どもの行動や姿を「なぜ？」の視点から見直し、実践を持ち寄り、具体的な支援を考える。

テーマ

インクルーシブ保育の理念に沿って、多様な子どもたちを包み込む保育のあり方を考える

講師

大阪公立大学
准教授 木曾 陽子

参加園所

AIAI NURSERY大淀中	大阪市立味原保育所	あすか保育園
大阪市立加島第1保育所	大阪市立瓜破保育所	にじの木保育園
大阪市立住吉乳児保育所	大阪市立喜連保育所	にじのとりに保育園
大阪市立長吉第1保育所	大阪市立千本保育所	日本橋幼稚園
大阪市立西大道保育所	大阪市立大正保育所	ひまわり幼稚園
大阪市立東小橋保育所	大阪市立鯉江保育所	みさき佃保育園
大阪市立矢田教育の森保育所	大阪市立松之宮保育所	みつばさ保育園
かがやきの森保育園 あいおい	大阪市立万領保育所	
クオリスキッズ北梅田 保育園	大阪市立三国保育所	
桜ノ宮サンフレンズ 保育園	キッズパレス美章園	

実施一覧

	日程	内容
1	5月28日	<ul style="list-style-type: none">・オリエンテーション・講義&演習:インクルーシブ保育とは?悩みの共有と支援検討のプロセス・講義&演習:視点を変える、子ども理解を深める
2	7月23日	<ul style="list-style-type: none">・演習:対象児の姿の共有・講義:「手立てを知る」・演習:保育環境と保育の流れの共有
3	9月8日	<ul style="list-style-type: none">・演習:模擬事例での事例検討・演習:AとBで分かれて実施
4	10月14日	<ul style="list-style-type: none">・ここまでの振り返り、事例検討①②
5	11月19日	<ul style="list-style-type: none">・実践の振り返り①②、事例検討③④
6	12月17日	<ul style="list-style-type: none">・実践の振り返り③④、振り返りとまとめ
7	1月28日	<ul style="list-style-type: none">・まとめの作成作業
8	3月4日	<ul style="list-style-type: none">・報告会

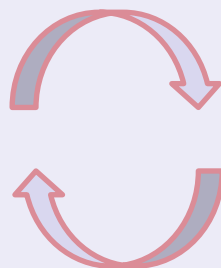
第1回【講義・演習】インクルーシブ保育とは



【全ての子どもが対象】障害の有無に関係なく／多様性の尊重

【個々の子どもの尊重】

子どもの個性の尊重／
一人ひとりを大切に／子ども主体



【共生・共育】

共に育つ・育ちあう／平等・対等／
みんなと一緒に／つながる／
排除しない／包まれる

【ニーズへの対応】

子どもニーズに合わせる・応える

【プロセス】子どもすべてを対象に個々の子の尊重やニーズへの対応を行い、
共生・共育に向かう保育を創造するプロセス

(木曾先生2025をもとに鶴先生が作成)

✿大切にしたいこと



1. インクルーシブな保育を目指す

→一人ひとりが「違う」ことを前提にして、

保育のあり方を見直したり、作り変えたりするプロセス

2. 「公正」のために合理的配慮を行う

→「同じ場において何もしない」ではなく、必要な配慮を可能な限り行う

3. ユニバーサルデザインを意識する

→はじめから、できるだけみんなにとってよりよい環境を模索する

目の前の子どもたちに合わせて保育のあり方を見直すチャンス!

視点をを変える

研究会で実際に行うこと



事例検討のプロセス

もう一度確認する

子どもの行動

先生が
困っている...

子どもが
困っているかも...

「問題行動」
と捉える

「なぜ？」

行動の原因や背景探る
(仮説)

アセスメント
子ども理解

その場しのぎの対応に...

その子に合った
適切な対応ができる

具体的な対応
手立て

早期から適切な対応をすることで...

- ★子どもの力を最大限に引き出す
- ★自己肯定感を下げない→二次障害の予防

視点を変えてみる

もしかしたら、
子どもが困っているのかも!!



【先生の困り感(例)】

1. 他の子どもが使っているおもちゃを奪い取る
2. 自分のやりたい活動でないと泣きわめいて嫌がる
3. お散歩のときに、手をふり払って道路に走っていきこうとする
4. 給食の偏食がひどく、白ご飯以外はまったく食べない



【子どもの困り感(例)】

1. このおもちゃで遊びたいのに、遊ぼうとしたら怒られた! (他の子どもが使っているということに気づいていない)
2. この活動はよくわからないし、嫌な音がするから怖い! (活動内容が理解できない。音への過敏さがある)
3. かわいい車が通ったから見に行きたかったのに、怒られた! (やりたい気持ちと行動を自分ではコントロールができない)
4. いろいろな食感のものが口に入ると気持ち悪い! (口の中の感覚が過敏すぎる)

子ども理解を深める



子どもの行動の冰山モデル

行動

★トップダウンかボトムアップか
意図的な行動か無意識的な反応か

1. 感覚 (5感+固有覚・前庭覚)
2. 記憶
3. コミュニケーション能力
4. 興味・理解
5. 集中力・思考のくせ

藤原里美(2015)『多様な子どもたちの発達支援 園内研修ガイド』学研教育みらい

モナ・デラフーク(2022)『発達障害からニューロダイバーシティへポリヴェーガル理論で解き明かす子どもの心と行動』春秋社

第2回【講義】手立てを知る



1. 基盤となる保育者との関係
2. 環境の調整
 - ・場所の構造化
 - ・「時間」と「活動」の構造化
3. 力を伸ばす保育の充実
4. コミュニケーションや行動の支援

【演習】保育環境と保育の流れを共有



- 子ども理解の時点で、保育環境や保育のあり方との関連で理解を深める
 - 子どもの気になる姿が生じるのは、子ども個人
の力や特性だけが原因ではない
- 手立ては、個別の支援だけではない。
 - 保育や環境の見直しも!

研究会で使用する支援検討シート

支援検討シート

気になる姿	ねらい	具体的な援助・手立て	その後の様子	気づき
<p>なぜ?</p>	<p>子どもを主語に スモールステップで</p>	<ul style="list-style-type: none">・物的環境の調整・クラス全体への支援・個別の支援		

子どもの視点にたって、子どもの困り感や障がい特性、集団との関係から考える

「改善する」という視点ではなく、その子の良さをベースにしたその子の育ちを大事に…

<子どもの強み・好きなこと>

第3.4.5.6回 振り返りと事例検討



<事例検討の手順①>

1. 事例提供者、司会、タイムキーパー、発表者を決める

2. 事例提供者から簡単な説明を行う

・対象児の年齢

・所属クラスの概要

特に話し合いたい姿を1つに絞る

・**対象児の特に気になる姿、対象児の強みや好きなこと**

3. 事例提供者に全員で質問をし、情報収集する

・特に、対象児の気になる姿について**4W1H**を聞いていく

・事例提供者は**具体的なエピソードを交えつつ**回答する

・適宜、保育室の環境図や日課などをみせる

【質問の例】

いつ、どこで、だれと、何を、どうした
→その姿が見られないときはあるか？

【回答者は…】




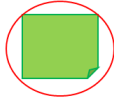




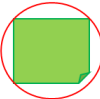

できれば解釈を入れず、入れる場合には、
そのように考えた理由も話す



<事例検討の手順②>

4. グループで決めた「気になる姿」について理由や背景(なぜ?)を考える
5. それぞれの付箋を見せ合い、似たものを近くに集めて、整理する
6. 出てきた「なぜ」の中から**有力候補2つ程度に絞り**、支援検討シートの「なぜ」の欄に記入する
7. 有力候補「なぜ」に対する「具体的な援助・手立て」を考える
8. それぞれの付箋を見せ合い、援助や手立て整理シートの枠組みを参考にしながら整理する
9. 整理した「援助・手立て」の中から**実践したい手立てを2つ選び**、支援検討シートの「援助・手立て」欄に記入する

援助や手立ての
整理シート

	1) 物的環境の調整 ※あらかじめ準備	2) 全体への支援や 保育方法の変更	3) 対象児への個別 支援
「なぜ」① 		 	
「なぜ」② 	  		 

✿事例検討で考えた手立てを、実際にやってみた様子とその後の対象児の様子を報告する。

第7回 まとめの作成作業



Bの方:まよめの作成

<内容>

1. 子どもの姿
2. なぜ?
3. 具体的援助・手立て
4. その後の様子・気づいたこと
5. 実践研究全体を通じた考察

<形式>

- A4用紙1枚(横書き)
- 手書きでもPCでも可(写真やイラストなど挿入も可)

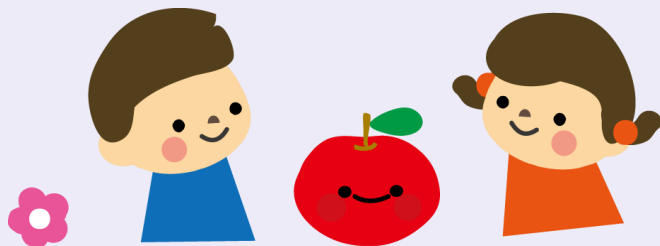
Aの方:まよめの作成

パターン①Bと同じ内容に以下を追記

6. メンバーの事例検討をサポートしたことによる気づき
7. 自園での取り組み(インクルーシブ保育に向かう風土を作る方法を考え、実践したこと)とその結果や気づき

パターン②A固有の内容に焦点づけ

1. メンバーの事例検討をサポートしたことによる気づき
2. 自園での取り組み(インクルーシブ保育に向かう風土を作る方法を考え、実践したこと)
3. 上記の結果や気づき
4. 研究会全体を通して考えたこと



第8回 研究報告会 最終講義



これからの障害児保育

統合保育(インテグレーション) → インクルーシブ保育

障がいのない子どもたちの
中に障がいのある子どもを
統合して保育する

一人ひとり多様であることを
前提に、すべての子ども一人
ひとりのニーズに応える保育
を目指す

A diagram illustrating the transition from "統合保育(インテグレーション)" to "インクルーシブ保育". On the left, a circle contains several orange dots. An arrow points to the right, where a cloud shape contains several multi-colored dots (green, blue, yellow, red, purple). The text explains that inclusive care is based on recognizing individual diversity and aiming to meet the needs of every child.

研究報告会で1年間の学びと成果を発表しました

一年間おつかれさまでした



インクルの
“**イ**”でポーズ

3歳児 男児

- ・パズルや紐通しなどの遊びが得意でよく集中している。
- ・平均台やトランポリンなど、体を使ってバランスを取るような遊びが好きで、意欲的に参加している。
- ・少しずつ発語が出てきた（ワンワン、（ちょう）だいなど）
- ・思い通りにいかないときや、嫌な時には泣いたりつねったりして気持ちを表現している



【気になる姿】

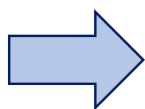
クラスが静かなタイミング
（朝の会、給食、午睡時など）で
「キヤー」と高く大きな声を出す
特に、午睡時は、周囲の子どもに
「うるさい」と言われることも
ある

【なぜ？】

- ① 大きい声を出す感覚が楽しい
- ② 話しているつもり

【具体的な援助・手立て】

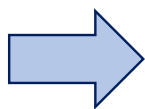
- ① 声以外に感覚の刺激を満たせる
ものを使う



【その後の様子】

本児がよく遊んでいるプッシュポップを布団の上に置き、触れるようにすると、寝ころびながら触り、大きな声を出すことは少なかった。しかし、3日ほど続けると、玩具を投げたり、声を出したりするようになった。その後、本児がその時に好きなものを触れるようにすると、午睡時に声を出す頻度は減った。

- ② 子どもの気持ちを言語化して
共感する



食事中に本児が「キヤー」と声を出した時に、視線を合わせて「おいしいね」とベビーサインと言葉で共感することを繰り返した。その結果、ベビーサインが使えるようになり、保育士が「おいしいね」と言葉をかけると、ベビーサインで答えるようになり、「キヤー」と声を出すことはほとんどなくなった。

【気づいたこと】

- ① 物を持って落ち着く姿が見られたが、繰り返すと声を出すようになっていたため、慣れてくると刺激ではなくなっているのだと考えた。
- ② 「おいしいね」と伝えることで、関わる機会が増え、食事中に声を出すことが減っているため、保育者との関わりを求める気持ちの表れだったのだと考えた。

【研究会全体を通した考察】

保育者が気になったり、困ったりしている子どもたちの姿に対して、「なぜ？」とその理由を様々な視点から考えることで、必要な援助につながりやすいことが分かった。

また、研究会の中で、一人の子どもに対して、その姿の変化を追っていく中で、同じ姿が繰り返されるように見えることもあった。しかし、「なぜ」を考えると理由が異なっていて、援助も違うものになった。

このことから、気になる姿として現れる子どもたちの思いを多様な視点で考え、汲み取っていくことで、子どもたちに応える援助ができ、その結果として、子どもたちが安心して過ごせるような保育につながっていくのだと考えた。

インクルーシブ保育研究会 まとめ

① メンバーの事例検討をサポートしてみた

A チームの役割・・・共に考える、ファシリテートする

ファシリテートとは・・・？



参加者の話し合いを円滑に進め、意見を引き出し、合意形成を支援する手法

《自分なりにやってみたこと》

- 相槌をうって話を聞く
- 相手が一通り話し終わったあとに質問して、より具体的な話を聞いていく
- 事例と別の話題をふって、話しやすい雰囲気をつくる
- 時間を意識して、話を進めていく
- 初めから自分の意見や正解を言ってしまうずに、まずは相手の意見を聞く

《今後に向けて》

グループの考えがまとまらない時の話の進め方に難しさを感じた。検討に迷いが見られた時に、話を戻したり気づかせたりできるよう、ファシリテートを意識して、自園でも努めていきたい

② 自園での取り組み

～みんなが過ごしやすく、誰もが楽しめる環境づくり～

講義で得た知識や、事例検討で得た保育方法を取り入れた環境づくりを行い、自園での公開保育等で他職員と共有してきた。

内容

- ① 子どもの興味や発達に応じた環境の定期的な見直し
- ② クールダウンできるスペースの保証
- ③ 視覚支援(イラストの手順表やタイムタイマーなど)の活用

結果

- ① 所内の公開保育などの機会に、環境づくりで大切にしていることを知ってもらったり、保育所全体で環境について考えることができた。
- ② クールダウンスペースを保育室内に作ったことで、以前よりもみんなが安心して過ごせるようになった。
- ③ 視覚支援をタイミングよく取り入れることで、活動の見通しや安心につながった。

気づき

- ① 環境づくりには、子どもの発達や興味を探ることはもちろん、他所の保育環境や他保育者のアドバイスがとても参考になる。積極的に取り入れていきたい。
- ② クールダウンスペースは逃げ場ではなく、安心できる避難所である。
- ③ 誰かのためにしている視覚支援が、全体の支援になっていること。

③ 研究会全体を通して考えたこと

- 子どもの行動には理由があり、その行動の「なぜ？」を考えることが大切。“～だろう”という主観や決めつけを抜きにして“見えているもの”から支援や手立てを考えていきたい。
- 個別への支援ばかりでなく環境を変えることで、どの子どもにとっても過ごしやすく分かりやすい保育になる。
- 園所の支援体制づくりと「保護者支援」の研修では、担任としての役割を再確認することができた。現在4歳時クラス担任で保護者に気になる姿を伝える場面も増えてきたが、促す役割と支える役割を組織の中でつくり、担任は100パーセント味方でいられるよう、信頼関係づくりや保護者支援に努めていきたい。



気になる姿

子どもの姿 (3歳児 Aちゃん)

- ・友達や保育者と関わることが好きで「一緒に遊ぼう」と誘って一緒に遊ぶことを楽しんでいる。
(じっくり1人で集中して遊ぶことは少ない)
- ・相手の言っていることが通じず、自分の思いと違うことがあるとイライラして大きな声を出す、物を取る・投げる・叩くといった姿がある。
- ・友達と関わることは好きだが、威圧的で命令口調で言うためトラブルになることが多い。

〈その後の様子・気づき〉

- ① 保育者が一緒に遊ぶ中で友達がしていることを説明する。(実況)
→保育者の話を聞き、友達のしていることに興味を持ち真似たり一緒に遊んだりする姿が見られる。自分の思い通りにしようとする姿もあり自分のしたいことができないと怒ったり泣いたりしている。保育者が仲立ちになって本児・友達の思いを聞き取りどうしたらよいかを一緒に考えたり保育者の提案に乗ったりすることで遊びに戻れることも増えてきた。
- ② 新しい玩具や本児が自分でできる玩具を増やす。
→本児が好きでクラス全体でも流行しているごっこ遊びができる玩具(お医者さんセット)や本児が1人でできるパズル、紐通しなどの玩具を増やしたことで友達や保育者と関わって役になりきって遊んだり、椅子に座って一定時間1人で集中して遊んだりする姿が見られる。

・遊びの中で特定の友達に自分の思いを強く押し付けているように見える。
(例:ままごと中に「〇〇ちゃんは赤ちゃんして」と役を押し付ける、「〇〇してくれないならもう一緒に遊ばない!」など…)

保育者自身はこう感じ困ることが多かった…

友達に意地悪している

自分の気持ちばかり押し付けている

なぜ?

- ①自分の遊びの進め方(展開)でないと分からないから不安
→そのため強く友達をコントロールして遊びを進めたいのではないのか?
- ②部屋の中に集中して遊べる玩具がない。玩具が難しいため面白くない。
→そのため「ままごと」に強くこだわるのではないのか?
(他の子どもも)

支援・手立て

- ①保育者が一緒に遊びながら友達の遊びを説明する(実況)
- ②新しい玩具や本児が自分でできる玩具を増やす

考えた手立てを基に新しい玩具であるお医者さんセットを使って、お医者さんごっこをして遊ぶ活動の導入部分を、自分の保育所で公開保育を行いました!

- ・絵本や保育者劇などで具体的に遊び方や玩具の説明をしたことで、共通のイメージを持ち遊ぶことができていた。
- ・お医者さんに行った身近な経験を、今子どもたちが興味のあるごっこ遊びに取り入れたことがより楽しく遊べた要因であったと気づいた。

〈研究会全体を通した考察〉

- ・子どもの姿を細かく具体的に観察し、なぜ?の理由を様々な広い視野で考え支援・手立てを実践していった。その後うまくいったこと・いかなかったことを振り返り、保育を見直した新たな支援・手立てを実践するという工程が重要であると学び、自分の日頃の保育を振り返る良い機会となった。
- ・グループワークを通し他の人に意見をいただいたことで考え方や捉え方、視野が広がった。
- ・子どもの気になる姿は子ども本人の困り感であり、必ず行動に理由がある。考えられる理由もたくさんあり、支援・手立てもたくさんある。」ということを知り、固定概念にとらわれず子どもとよく関わり観察することでなぜ?を様々な視点で探っていくことが重要だと感じた。
- ・支援・手立てを考える際には、本児に向けての個別の支援を考えることも重要だが、その前に普段の保育を見直し、環境を整えたりルールを決めたりして実践していき、どの子どもも過ごしやすい環境・保育を行っていくことがインクルーシブ保育において重要と学んだ。
- ・「インクルーシブ保育とは、障がいの有無に関係なく一人ひとり多様であることを前提に、すべての子ども一人ひとりのニーズに応える保育のことである。」ということを踏まえて、みんなが楽しく過ごせるためにはどうしたらよいか?子どもにとって本当に必要なことなのか?ということを考え、子どもの姿に合わせて保育を変えていくことが重要だと感じた。

☆子どもの姿☆

- ・ 3歳児 男児
- ・ 人と関わることが好きで、いろいろな人と関わろうとする。

(気になる姿)

- ・ 動かたばに人や物にぶつかる。



なぜ？

- ①反射的に身体が動く。
- ②自分の身体の大きさがわからない。

具体的な援助・手立て

- ①遊びを通して、「動く」「止まる」を経験出来るようにする。
「ストップゲーム」「リトミック」など。
- ②・座る用のマットを用意する。
・ボールプールで遊びながら、自分の身体の大きさを知る。

その後の様子・気づいたこと

- ①遊びを通して、止まろうとする姿もあるが、気持ちが昂ると自分で動きを制御できず、人にぶつかってしまう姿が見られる。過剰に反応するとより制御できなくなってしまうので、静かに止めるようにすると、少しずつ止まれるようになってきた。
- ②座る用のマットは、最初物珍しさで興味を持ち座っていたがすぐに飽きてしまっていた。
絵本やブロックのコーナーに使用すると、視覚的に人数がわかるようになり、クラス全体への支援として有効であった。



- ③ボールプールは、遊びも簡単で全身にボールが触れる感覚を楽しむ姿がみられた。
また、普段の関わりの中で、本児の身体に触れ、スキンシップを通して、ボディイメージがつかめるような関わりを取り入れた。少しずつ身体の大きさを感じられるようになってきたようで、狭い場所などに無理やり入っていく事が減ったように感じる。



実践研究全体を通じた考察

- ・ 研修を受ける前は、わざとぶつかっているのではと感じていたが、本児の感覚の鈍感さや、ボディイメージを持っていないことから見られる行動なのではと感じ、アプローチの方法を変えて関わってみようと思うことができた。
遊びを通して感覚に刺激がいく経験を積み重ねて、ボディイメージをつかみ、力の加減をつかんでいけるように関わっていききたい。

メンバーとの事例検討をサポートしたことによる気づき

保育環境や職員の配置、生活リズムなどが違う園の様子を聞き、どのように支援していくのかを考えることが難しいと感じた。その反面、違った視点からの意見を聞くことで、新たな支援方法が出てくることもあり、第三者の視点の必要性を感じた。
グループ討議を進行している中で、みんなの意見を引き出すことの難しさを感じた。研修で用いた、付箋を使った方法だと、全員が意見を出すことが出来るので、様々な意見を取り入れたいときには有効であるということを知ることが出来た。

自園での取り組み

それぞれのクラスで支援カードなどが違うので、統一していきたい。

《クラス概要》

5歳児 13名クラス
男児5名 女児8名 担任1名

《子どもの姿》

- ・A児 5歳児 男児
- ・ゲームやYouTubeをよく見る。
- ・戦いごっこが好き。
- ・歌を歌ったり、体を動かしたりが好き。
- ・友だちや保育者と関わることが好きで距離感が少し近い。

《気になる姿》

- ① 友だちとの関わりの中で手が出る(必要以上に触ったり、引っ張ったり)ことがある。
- ② 常に興奮状態で、部屋を走り回る。玩具や手に持った物を振り回したり、投げたりする。

なぜ？

- ① 友だちが好きで遊びたいから
- ② 楽しいから

援助・手立て

- ① 友だちとの関わり方を知らせていく。
- ② 本児自身の頑張りを認める、褒める。

《実践研修会全体を通じた考察》

複数で支援について考える事で、それぞれの視点や知識を活かしながら、本児への関わりを広げていけることを実感した。

自身の考えや先入観と切り離し、子どもの具体的な姿だけを伝えて意見をもらうことで、改めて落ち着いて子どもと向き合うことができたと感じている。

これまで、子どもの姿をよく知る者同士でなければ的確な話は難しいと考えていたが、クラス外や園外の保育者との意見交換を通して、新たな視点や気づきを得ることの重要性に気づいた。

今後も、積極的に周囲と情報を共有しながら、多角的な視点を取り入れ、子ども一人ひとりに応じたより良い支援につなげていきたい。

《その後の様子と気づき》

- ① 友だちとの関わり方では、「今、相手の子どもと何をしたいか？」自分の気持ちに気づけるようにし、その上で、触りたい時はどうしたらいいか、相手の気持ちを一緒に考えていく援助をした。
頭では理解できているものの、衝動性が強く、他児の顔に触れようとしたり、物を投げてしまったりする姿が見られる。同じクラスの子どもに対しては、相手の表情や気持ちを少しずつ読み取ろうとする姿が見られるようになってきたが、下級児に対しては関わりたい気持ちが先立ち、勢いよく近づいてしまうことがある。
- ② 肯定的な言葉掛けにより認められた経験を積み重ねる中で、望ましい行動を意識し、継続しようとする姿が見られるようになってきている。一方で、危険につながる行動や、相手が嫌だと感じる関わりに対しては、周囲の子どもからの注意の声が上がる場面も見られ、課題となる行動が目立ちやすい状況もある。そのため、本児の努力している姿や適切な関わりができた場面を丁寧に捉え、周囲の子どもにも伝わるような言葉掛けを行いながら、今後も肯定的な関わりを大切にしていきたい。

①はじめに～事例検討をサポートしたことによる気づき～

当研究会にてメンバーからエピソードを聞き取り、事例検討を進めていく中で、子どもに対して先に抱いていたイメージを優先せず、まず状況そのものを見ることの大切さに気付いた。状況に目を向けることで、子どもの行動が何から生じているのかを多角的に考えることができた。検討した支援内容がすべて対象児に合致していたわけではなかったが、これまでにない視点で子どもの姿を捉えられるようになった。担任をしていると「○○だから△△している」と判断しがちであるが、その判断だけが子どもの本当の姿ではないことに気付いた。それを踏まえて自身の保育所にて以下の実践を行った。



②保育所での取り組み

(インクルーシブ保育に向かう風土を作る方法を考え、実践したこと)

保育所全体での取り組みとして、以下の方法で進めていくことにした。

①自分のクラスで気になる子どもの姿を捉え、その姿をもとに環境構成やおもちゃづくりを行う。

※クラス内で実践するとともに使用例をみせ、他クラスへの貸し出しをし、落ち着いて過ごせるコーナーづくりの支援。

②クラス内で困っている子どもの姿をききとり、普段から気になる子の姿を把握していく。

※日々の会話の中で「子どもの求めていること」、「子どもが本当に困っている部分」などを意識しながら話を進める。話していく中でその子への支援をどうしていくか一緒に考えていく。

各クラスの運営に無理が生じないよう配慮しながら、必要に応じて取り入れられる形で環境が整うよう助力する。実践は自分のクラスを起点とし、保育所全体へ広がる形を意識して進める。

③ 実践の結果や気づき

・環境設定を自分のクラスから整えたことで、対象児が落ち着いて過ごせるスペースを確保することができた。その実践が他クラス的环境づくりの参考となり、間接的に保育所全体の環境を整える一助となったと感じた。直接的な助言ではなく、各クラスが「取り入れたい」と感じる形で提示することで、担任の負担感を軽減しながら進めることができた。

・日頃から他クラスの子どもの姿について話を重ねることで、職員間の関係性が深まり、多様な視点から子どもを捉え、支援を検討できるようになった。



④ 研究会全体を通して考えたこと

研究会全体を通して、保育には「失敗」という概念はなく、子ども一人ひとりが今何を必要とし、何を感じ、何に困っているのかを丁寧に見ていくことが重要であると気付いた。子どもにとって興味のないことや見通しの持てない活動は参加しにくいいため、参加そのものを求めるのではなく、参加の方法を工夫し、本人の集中力や思考の特性を踏まえた課題設定が必要であると考えられるようになった。保育は「こうさせなければならない」ではなく、「こうでなくてもよい」と柔軟に捉えることで、大人も子どもも無理なく成長できると感じた。今後もファシリテーターとして、子ども・保育者・保護者すべてにとって負担を少なくしつつ、よりよい環境づくりを大切にしていきたい。

【子どもの姿】

2歳児 男児

・室内では電車の玩具、戸外では友達とおいかけっこをして遊んでいることが多い

・友達の動きにつられることがある

・活動そのものには参加しているが、**活動の変わり目に走り回ることが多い**

※1 午前のおやつ

- 戸外遊び
- ①食器を片づける ②手口を洗う ③排泄をする
 - ④帽子をかぶる ⑤靴を履く

このタイミングで走り回る

※2 保育室での活動

- ホールでの活動
- ①ホールへ移動する

このタイミングで走り回ることがあまりない

【なぜ？】

(1)短い見通しがつきにくいのかも？

上記の※2では走り回ることがあまりなく、※1では走り回ることが多いことから、※1は活動の変わり目での活動がたくさんあり、分かりづらい？

(2)走っているほうが落ち着くのかも？

【具体的援助・手立て】

(1)①絵カードで、生活面に関する次の活動を知らせる

(2)②保育室に歩きたくなるような道を作る

③本児の席に足裏の刺激になるようなものを置く

【その後の様子・気づいたこと】

①次の活動について、絵カードを見ながら「何をするんだった？」と声をかけられることで、「トイレいく」などと言い、行動に移すことができた。

●聴覚からの情報より、視覚からの情報のほうが効果的であることがわかった。

また、絵カードを見ることでその絵だけに集中することができ、「自分でできた」という経験を増やすことにつながった。

②保育室にビニールテープで道を作ってみたが、本児は興味をもたず、効果はなかった。

●道を歩く前に絵カードを見て自分で次の活動に気づけることが増えたことが理由として考えられる。



③本児の席の足元に足裏への刺激になるように、人工芝のマットを置いてみると、走り回ることなくスムーズに着席するようになった。

マットの上に両足をそろえて座り、以前よりも姿勢の保持ができるようになった。

●足裏への刺激を欲していることがわかった。活動の中に本児にとって足裏への刺激になるものを置いておくことで落ち着いて活動できるようになることがわかった。

【実践研究全体を通じた考察】

・気になる姿ひとつを深く掘り下げることで、子どもの理解がより深まった。「こうかもしれない…」と思うことを担任間で共有し、やってみる大切さに改めて気付くことができた。やってみたことの中にはうまくいかなかった支援もあったが、なぜうまくいかなかったのかを考えると、子どものことをまた一つ知るきっかけになり、とても学びが多く、私自身の保育の引き出しを増やすことができた。

・他の園所の先生方と交流することで、思いつかなかった支援方法や環境づくりを知ることができた。

インクルーシブ保育研究会 まとめ



子どもの姿

3歳児クラス 17名担任2名 男児

- ・言葉がはっきり出ていない(本児なりには伝えようとしている)ため、友だちとのやりとりを成立させることが難しい。
- ・友だちの真似をすることが楽しい。
- ・自分で遊びを見つけたり集中して遊んだりすることが難しい。
- ・友だちが嫌がることを繰り返し行う。相手が嫌がっていても続ける。
- ・動きが激しく、移動は基本的に走っている。

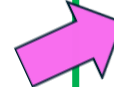
気になる姿

- ・移動時に常に走っている。



なぜ

- ・走ることが心地良い。
- ・自分で遊びを決められない。



具体的援助・手だて

- ① 走る以外の刺激になるものを用意する。
- ② 特定の子どもを交えながら、保育者が遊びに誘う。

その後の様子・気付いたこと

- ・足元に足形のついた踏み台を置き、着席時に安定して座れるようにすると、少しずつ慣れて落ち着いて座る姿が見られるようになった。
- ・歩くことをただ伝えるのではなく、一緒にリズムに合わせて歩くことを楽しめるようにすることで、友達と楽しく歩く姿が見られるようになった。
- ・他の子どもたちと担任が遊んでいる環境に誘い、席を用意することで楽しい雰囲気の中で過ごすことを喜ぶ姿が見られるようになった。
- ・玩具の使い方や遊び方などを一緒に遊びながら伝えることで、より興味を持って遊びの輪に入り、落ち着いて遊ぶ姿が増えてきた。
- ・保育者が子どもたちの輪に入って一緒に遊ぶことで、子どもたちが興味を示して遊びを楽しんだり集中して遊んだりする姿が見られるようになった。子ども同士の関わりも大切だが、改めて子どもたちと一緒に遊んだり遊び方を伝えたりすることも大切だと感じた。

実践研究全体を通した考察

- ・気になる姿に気が付くと、すぐに具体的援助を求めてしまいがちだが、「なぜ？」を考えることが大切だと感じた。
- ・「なぜ？」を担任間で話す時間を設けていくべきだと感じた。
- ・他の保育所の先生方の意見や考え、経験を聞くことで新しい発見も多く、とても刺激的な時間を過ごすことができた。経験を積み重ねれば積むほど新しいことに挑戦する機会が減ると日々感じていたが、様々な意見を取り入れながら子どもに寄り添って保育を進めていきたいと感じた。



子どもの姿・好きなこと 【2歳児 男児】

- ・線路を並べ、電車を走らせて遊ぶことが好きで長時間集中して遊ぶ。
- ・友達とままごとをすることもあり、言葉でのやり取りもしている。
- ・周りの人の言葉をよく聞いており、真似してその言葉を使うことがあるが、その意味を理解しているかは不明。
- ・歌を覚えることが早く、遊びながら口ずさんでいる。
- ・保育士や友達を突然押ししたり叩いたり、物を投げたりしてしまうことがある。



気になる姿

- ・保育者や友達を叩いてしまう
- ・気持ちが高ぶっているときもあれば無表情・無言で叩くこともある。

なぜ？

- ① 遊びの一環
- ② 相手との関わり方が分からない

具体的な援助・手立て

- ① 「叩かれると痛いよ」と絵本や絵カードなど表情を視覚からわかるもので伝える。
- ② 叩く前に止め、声のかけ方を知らせる。

その後の様子・気付いたこと

- ① 本児が絵カードに興味を示したため、保育者が絵カードを指しながら表情を言葉で伝えると、自分で指さししながら「痛い、泣いているね」「これはだめだよって言う」と言葉で表現するようになった。しかし友達や保育者に対して叩いてしまうことは変わらず、相手が泣いている、怒っている場面で絵カードを見せると無反応だった。しばらくすると「お友達泣いているね」と言葉にすることがあった。
自分の感情は言葉で表現できるが、相手の感情と結びついておらず、相手にも感情があることがまだ理解できていないと考えられる。
- ② 叩く前や叩いてしまった後に保育者が言葉のかけ方を伝えたことにより、友達に「遊ぼう」と声をかけたり、優しく頭をなでたりする姿があった。しかし気持ちが高ぶっている場面では、保育者が声をかけると聞こえていない様子が見られたり、エスカレートしたりすることが多かった。
感情のコントロールが難しいが、友達と一緒に遊びたい気持ちがあると考えられる。

【今後に向けて】

- ・保育者との関係をさらに深めながら、一緒に遊ぶ中で正しい行動を伝えていく。
- ・本児が友達と関わって遊んでいるときには見守る。良い関わりができたときには褒め、自信へと繋がるようにする。
- ・本児を加害者にしないためにも、行動がエスカレートしそうなときは部屋を移動したり、少人数で活動したりと気持ちを切り替えられるようにする。

【実践研究全体を通じた考察】

- ・グループでの話し合いの中で、違う園同士だからこそ違った視点から物事を考えられ、新しい発想を知ることができた。
- ・子ども1人ひとりが違うように、保育者もそれぞれ違っていいのだという事に気が付いた。誰もが個性や違う考え方があり、それを言葉にすること、お互いに認め合うことがインクルーシブ保育にとって必要な事だと感じた。

この2つの様子から、本児にとってはまだ相手の感情を知ったり、感情をコントロールしたりすることが難しいのではないかと

1.メンバーの事例検討をサポートしたことによる気づき

◎ファシリテーターとして

- ・メンバー一人ひとりの声を拾う前に、それぞれが声を上げられるような進め方が必要である。
- ・検討の際に①気になる姿②理由や背景（なぜ？）③具体的な援助・手立てと順に話を進めていき、具体的な支援を導き出す。そのためにファシリテーターは以下の点に注意し、話の進行と軌道修正を行う必要がある。
→個々が考えを出し合うため、話が広がることが多いが的を絞って話していくことが大切である。

◎インクルーシブ保育について

- ・一度の事例検討で出た支援が必ず上手くいくとは限らないため、検討を重ねていくことも大事である。
- ・検討を行う上で、皆が対象児の“ありのままのその子どもの姿”を思い浮かべることができるよう“気になる行動のあるとき・ないとき、具体的なエピソード、4W1H”を感情論や解釈ではなく客観的な視点で伝えることが大事である。

2.自園での取り組み

（インクルーシブ保育に向かう風土を作る方法を考え、実践したこと）

自園での取り組みとして、部屋の環境を変えることについてクラスで話をした。クラス内では、研修の職員（研修生）が在籍している状況があった。

クラスの環境を考えていくうえで担任3人がそれぞれ案を出し合い、一つひとつ試している。まずは、話しやすい環境を作るために敢えて話し合いの場を設けるのではなく午睡時間の子どもに寄り添っているときなどに話題を持ちかけた。

そのことにより、普通の会話のようにスムーズに案が出た。その後も“話し合い”に対するハードルが下がり、上手くいっている点や課題がある点を出し合い次の工夫へという流れを必要に応じて行うことができていく。

また、研修生に対しての質疑応答を自身だけでなく担任3人が揃う中で行うことで他の2人からも助言がなされていた。研修生の質問を通し“子どもへの対応”や“その時々への対応の工夫やアイデア”、“その職員の視線での対象児の姿や気づき”を共有する良い機会となっている。

3. 1～2の結果や気づき

2の実践を行うにあたり、先ずは事例検討へのハードルを下げ、その中でも互いの意見交換と次への工夫へとつなげることができているように思う。

また、研修生の声を交えることで今一度子どもとの関わり方（子ども同士のトラブルなどへの対応の仕方も含め）を考える機会になった。

クラス内で考え方などを共有することができ、担任同士で新たな気づきにもつながっているように思う。

3.研究会全体を通して考えたこと

◎ファシリテーターとして

ファシリテーターは、話の場（検討会）の進行役だけでなく参加者の声を引き出していくことが必要であることを学んだ。また、その際に具体的な課題を皆で共有しつつ手立てを導き出していく役割があることを学んだ。

事例検討を通して実際にファシリテーター役となり、先ず参加者全員の声が上がるように引き出す言葉を投げかけていく配慮が必要であることを学んだ。また、話を進めていく中で感情論や解釈が入りやすいことを肌で感じ、検討を進めていくためには客観視した考えを出し合えるよう促していくことが必要であることも学んだ。

上記の学びと共にファシリテーター役になることの難しさを知った。今回の研修のように、様々な人（考え）を交えた事例検討を重ねることは、今後自園で話し合いを行っていく上で意義のある経験になった。

現在、自園に様々な立場の職員が新旧含め在籍している。検討会時のみならず日頃より、一人ひとりが声を上げやすく言葉を交わしやすい関係性を構築できるよう心掛けていきたい。

◎インクルーシブ保育について

“インクルーシブ保育”に対する考えが「障がいのある子どもがどのように皆と同じように参加できるかを考える」というものから「障がいの有無に限らず、一人ひとりが多様であることを前提に目の前の子どもの必要に応じた援助を行い参加できるかを考える」というものへ変わった。

また、大人の見る“目の前の子どもの困り感”を探っていくとその行動は『意図的な行動』か『無意識な反応』なのかによるものであり、そこに気付くことで子どもの理解につながりその子どもの必要とする援助を行うことができることを学んだ。

2歳児 Aくん



- ・汽車遊びが好きで1人で集中して遊んでいる。
- ・友達関係で玩具をめぐるトラブルになることが多い。
- ・“自分で”という意欲がとても高く、そこに他児が入ってくることを嫌がる。

気になる姿

- ・自分の思いが通らないと友達を噛んだり叩いたりする。

なぜ？

- ・思いを伝えようとしているのに伝わらない。
- ・自分のペース、1人で遊びたい。

具体的な援助・手立て

- ・対象児の側に保育者がつき、他児に伝えようとする姿にすぐ気づけるようにしたり思いを代弁したりして相手に思いが伝わる経験を重ねられるようにする。
- ・言葉だけでなく、表情カードを使って自分の思いを相手に伝えられるようにする。

その後の様子

- ・保育者のつき方として対象児だけでなく、周りの子の思いもくみ取りながら関わるように意識した。実際やってみて、一生懸命言葉で伝えようとしている姿があったため、表情カードは用意していたものの使わず、保育者が間に入って言葉で伝えるようにしていた。対象児と一緒に相手に伝えようとしたが“自分で”という思いが強かったため対象児が他児に伝える様子を見守りながら相手に伝わっていない様子が見られたら保育者が付け加えたり代弁したりするようにした。
 - ・この間に玩具の取り合いにおいて対象児が他児に噛まれる事案も発生したため、自分の思いを他児に伝えるだけでなく、他児の思いにも気付けるように今後も援助していきたい。
- 密に時間をかけて関わることにより、2歳児の発達段階である“自分で”という思いがぶつかることにより手が出たり友達のことを噛んだりすることが増えてくることが分かった。また、その中で見えた課題にも向き合い、今後も丁寧に関わるように心がけていきたい。

実践研究会全体を通じた考察

研究会を通して、気になっている子どもの姿の中で子ども自身も困っていることがあることを知り、その中で子どもの困り感に気付いて子どもの視点から手立てを考えていくことが子どもを理解して向き合うことだと思った。他の保育所の方に自分しか知らない子どもの姿を伝えるために、いつも以上に対象児のことを観察したり子どもの援助を考えたりする中で、より子どもと向き合って関わる時間が増えたように感じた。

保育者が援助や手立てを考えるにあたり、つい子どもの弱みばかりに目を向けてしまいがちだが、どの子にも強みがありその強みを保育者が理解することで子どもにとっての安心感につながってくると痛感した。

1人の子どもと向き合ってみて、今までは見えてこなかった子どもの良いところと課題が見え、引き続き子どもと真摯に向き合っていくよう努めていきたい。

【クラスの概要】

クラス 28名 担任2人

認定児3名

外国籍2名



【気になる姿】

棚の上に登り、
飛び降りる

なぜ？①

ひとつの遊びとして
捉えているから。

なぜ？②

飛び降りる感覚や
スリルが楽しいから。

【具体的な援助・手立て】

★感覚を他の遊びで補えるようにする。
(トランポリン、足裏刺激遊びなど)

上記の感覚遊びをひとつの遊びと
して捉えられるようにしていく。

【子どもの姿】

- ・3歳児 男児
- ・自閉スペクトラム症、療育手帳 B1
- ・友達(人)に興味がある
- ・絵本が好き。ながら読みをしたり、床に並べたりしている
- ・身体を動かしたり、高い場所に登ったりすることが好き
(かけっこやトランポリン、アスレチックなど)
- ・信頼関係の築けた大人との関わりが必要

【その後の様子・気付いたこと】

- ① 足裏を刺激するマットについて、コーナー遊びとして遊べるように設置する。マットにとっても興味を示していた。芝生や足つぼのマットが好きであり、繰り返し行っていた。数分経つと遊びに飽き、棚に登ったり、しきりに背中でもたれたりしていた。
- ② トランポリンについて、クラス全体の遊びに取り入れる。子ども全員で順番に回りながら行ったため、順番がスムーズに回ってこないなど十分に遊ぶ時間を設けることが難しかった。トランポリンの持ち運びが難しく、プレイルームでの活動となるため繰り返し行うことが難しかった。

最近では、棚から飛び降りることが減ったものの、部屋を分けるしきりに背中でもたれたり、ぶら下がったりし、姿に変化が見られる。児の様子から、バランスをとりゆらゆらした感覚を好んでいると考える。児の好きな感覚を、安全に取り組めるように環境を整えていくことが必要であると気付いた。

【研究会全体を通じた考察】

グループで子どもの気になる姿を共有し、一緒に「なぜ？」を考えることで、自分では思いつかなかった他の人の意見が出てきた。その「なぜ？」に対して色々な援助・手立ての方法を出し合うことで子どもに合った支援を考えることができた。支援を考えて行く上で、その子どもについて知ることが必要であると感じる。その子どもの気になる姿について、どんな場面でもどんな行動や言動があるのか、など様々な背景を出すことにより、よりその子どもに合った支援を考える第一歩になると気付いた。

メンバーの事例検討サポート者として

【①対象児の「なぜ？」を引き出せるように！】

研究会の中で、各施設の対象児についてワークする中で、ワークを進める司会者として、どのように話を聞けばいいかを考えながらサポートした。その中で、対象児の「なぜ？」を一緒に考えていくことは、新しい発見につながり、自分では思いつかない考えや視点があることに気付くきっかけとなった。



【②保育所内での実践と取組】

インクルーシブ保育に向かう風土をつくるために

- ・研究会の内容を伝える
- ・資料を回覧する
- ・所内研修を実施し、会議の中で、クラスの子どもたちの困っていることなどを、丁寧に伝える

実践したこと

- ・研究会や研修などで、聞いてきた話を会議の中、日々の何気ない隙間時間に意識して伝え、コミュニケーションを多く取るようにする。
- ・保育が楽しくなるように、他のクラスを巻き込んで、異年齢で交流を多くもつようにする。
- ・子どもだけではなく、職員にも目を向け言葉をかけるようにする。

【③実践を通しての意識の変化】

- ・自分のクラスだけではなく、保育所全体のことも、一層気にかけるようになった。
- ・自分も困っていることを、話したり相談したりすることで、他の先生もクラスのことや、保育のことについても話をしてくれるようになった。
- ・一人で悩まず、子どもたちを保育所全体で見たいこうとする気持ちが出てきた。
- ・「困った子どもは、困っている子ども」であるという子どもを見る視点が変わった。



【④研究会全体を通じた気付きと学び】

- ・子ども理解を深めることで、手立ても変わってくる。そのため「なぜ？」をしっかりと考えていく必要性を感じた。
- ・一人ひとりの「違い」を認め保育をすることは、自分の保育観、保育のあり方を見直すチャンスと気付いた。
- ・子どもの姿から、クラスの環境や手立て、1日の保育の流れを組み立てることは、保育者がしたい保育に合わせるのではなく、生き生きと、子どもが主体になり楽しく、落ち着いて過ごせることを実感した。
- ・人の意見を聞いたときに「私だったら…」と思うことが多かったが、「そんな考えもあるんだ」と思える自分での大切さを感じた。

3歳児 男児

クラス:17名 担任1人 補助1人



子どもの姿

- ・乗り物が好きで自由遊びでは、ブロックで車を作ったり、汽車で遊んでいる
- ・2歳半くらいから言葉を話し始め、話せる言葉は増えているが、伝えたいことが思うように言葉に出来ないことがある
- ・友達より遅れたり、間に合わなかったりするときがあると泣いてパニックになる
- ・集団活動など本児が興味のないことには参加しない

気になる姿:朝の会の時に友だちを押しに行く



なぜ?①
朝の会が面白くない



なぜ?②
本児が通りたい所に友だちがいるから

具体的な手立て

- ①ほっこりスペースを作って朝の会に自由に参加できるようにする
- ②座席を変えてみる



その後の様子・気付いたこと

- ①ほっこりスペースを作ることで、朝の会に参加したいとき、したくないときに本児自身が、その日の気分によって、ほっこりスペースに行き、朝の会に参加できていた。そこからは、歩き回ったり、友だちにぶつかりに行く姿が見られなくなった。→だが、他児もほっこりスペースに行きたいと言っていて難しいと感じた
- ②座席をほっこりスペースの近くにするすることで、周りの子どもが気にすることなくほっこりスペースに行っていた。
- ③ほっこりスペースを作った時は上手く使い分けていたが、他児が歌っている姿が気になり朝の会に参加することが増えた。しかし、興味のない曲があるとほっこりスペースではなく本児のロッカーに頭を入れたりなど新しい行動見られるようになった。→職員同士で話し合い手持無沙汰になっているのではという意見があり歌詞カードを持つなどして様子を見ている。
- ④12月に音楽会があり、歌や合奏など練習に参加していないことが多かったが、本番振り付けや歌詞など全部出来ていた。練習している様子を見たりして、本児なりのやり方で覚えていたと気付かされた。

研修会を通した考察

- ・気になる子どもの「なぜ?」についてグループで話し合いをする中で客観的な考え、意見が得られたと感じた。今まで気になる子どもがいても保育者の主観で、子どもの深い所まで考えることができていなかった。今回の研修で自分自身が子どもの気持ちになり「なぜ?」や手立てなどを他園所の先生と意見交換することで、自分とは違う視点の考えや他園の保育の仕方を知ることができた。
- ・他にも、他園の気になる子どもについて一緒に考えることができ、新しい援助の仕方も知ることが出来た。
- ・実際に話し合った手立てを実践してみて、上手くいくところや苦戦することなどあったが、子どもの新しい姿を発見することが出来た。
- ・今回「なぜ?」の大切さを知ることができ、これからも「なぜ?」の視点から子どもの姿について考えることを意識し、研究会で学んだことを今後の保育で活かしていきたい。



1・【メンバーの事例検討をサポートしたことによる気づき】

グループ内メンバーの事例を聞き「子どもの気になる姿のなぜ」を子どもの視点になって考え、他所の保育者と共有し出来る手立て、援助を考えることで、違った視点から子どもの姿を捉えることができた。

色々な保育者の意見を聞き共有することは大切であり、そこから新たな考え方ができる。対象者に向けての手立てが他児にも有効なこともあり、色々な手立てを実践する中でその子どもにあった援助が見つかった。

2・【自園の取り組み】

絵カードを使い、視覚から伝えることで理解しやすい環境作りや、制作を行う時などは一人ひとりにあわせながらボードを使用し、落ち着ける空間作りを行った。

又2歳児ではキッチンセット（手作り）や玩具の棚を設置し自分で玩具を選んで子どもたちが主体で遊べる環境を作ったことにより遊びが広がり遊びこめるようになった。

3・【上記の結果や気づき】

「全体への支援」「個別の支援」「物的環境」に分けて考えることでさまざまな面からの支援方法を多く学ぶことができた。

一人で考えるのではなく周りの人と共有し客観的な視点から考えていくことで、保育所全体での子どもにとってよりよい支援に繋がると感じ、今後も「共有する・話し合う」ことを意識していきたいと思った。

4・【研究会全体を通して考えたこと】

普段の保育について習慣になっていることも「なぜそのような方法で行っているのか」「他の手段はどうか」と新たな視点で保育を見直し柔軟に考えていくことの大切さを感じた。

これからも「なぜ」の視点から子どもの姿について考えることを実践し、今後の保育に活かしていきたい。自分自身の思い込みだけで行動をきめつけるのではなく、子どもからのSOSに気づき一人ひとりを尊重した保育を実践していきたい。

目立って見えるところだけでなく子どもの良いところに気付いて考え、具体的な援助をして保育を進めていきたい。

5歳児 女の子



※気になる姿※

- 思ったことをついついすべて、
 - ・口にしてしまう
 - ・行動に出してしまう

※子どもの姿※

- 友達、先生など人が大好きで人懐っこい
- 絵本や物語が大好き♡
- 新しいことへの好奇心旺盛☆
- 話や出来事などよく覚えている
- 話をすることが好き♡

※なぜ※

- ① 普通に話しているだけ（正義感）
- ② 思ったことをすぐにしないと気がすまない（コントロールがまだ難しい）

※援助・手立て※

- ① 気持ちや考えをしっかりと受け止める
- ② いいところをたくさんみつめて伝える、褒める
- ③ 色々な意見の人がいる事を知っていけるようにする
- ④ 「こういう時は〇〇っていうんだよ」と伝えていく
- ⑤ 心の中で考えられるよう導いていく

※その後の様子・気づいたこと※

- 自分自身の子どもや人に対する言葉遣いや言葉かけを見直し、素敵な部分を見つける度に言葉にして伝えたり、ありがとうなど言われてうれしい言葉をたくさん言ったりするように心掛けた。本児も褒められることが好きなため、前向きな姿が増えたように感じる。また、友達に対して「かわいいね」などの言葉を自ら伝えるようになった。
- 星の色塗りをする際に、自分のイメージは黄色だが、友達がピンクで塗っているのを見て、上から黄色に塗りつぶしてしまった。ハートも赤やピンクなど様々な色で塗るように、「それぞれ色々なイメージがあっていいんだよ。」と伝えた。1か月後、各チームで写真を撮る場所を決める場面があった。その時、「私は〇〇がいい、でも△△ちゃんはどこが良いか聞いてみよう」と自ら話し合っ決めてようという姿が見られた。

※考察※

- 保育自体に影響はほとんどないが、個々に見てみると少し気になるような子どもに対して、大人側から見た姿だけでなく、自分が一度子どもの立場になって考える事で見えてくる景色や考えの違いにハッとさせられることが多く、向き合い方を改める機会になった。こういう子にはこうしよう、という保育士の主観はなく、それぞれの性格や好きな事、得意な事、気になる事など全然違うので、それぞれの立場に立ってどのように援助していけば良いのか、何を大切に関わっていくのかなど考えることが大切だと学んだ。子どもの行動に対して、「だめ」「こうしなさい」と決めつけて声をかけるのではなく、「なぜ？」を探す必要性を感じた。
- 気になる子がクラスの輪に入れるようみんなに合わせるのではなく、どうすれば全員が楽しく過ごせるかを平等に考える事も大切だと学んだ。

4歳児 19名クラス 外国籍男児

♡好きな遊びをしている時に保育者を誘いに来る。

♡保育所に嫌がらずに来ている。

・日本語が出てきており単語や簡単な文章で保育者に気持ちを伝えている。

・初めての活動は見ていることが多い。

・友達が動く姿を見ると同じように行動するときもある。



エピソード

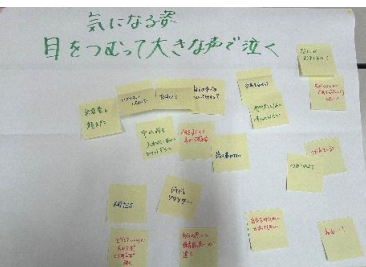
・避難訓練の時、『片づける⇒部屋に入る』の流れがないまま部屋に入る
ことになり、目をつむって大きな声で泣いていた。しばらく担任に抱っこさ
れ少し落ち着くと、次は「こっぷ! こっぷ!」と言う。一緒に遊んでいた担
任が『さっき使っていた砂場用おもちゃのコップが欲しいんだな』と言
葉の意味を理解し、一緒に探しに行く。コップを探し始めると泣き止み、
見つけると気持ちを切り替えることができた。

気になる姿は? ➡ 目をつむって大きな声で泣く

なぜ? ①保育者の言っていることが分からない

②伝えたい気持ちが伝わらないもどかしさ

→この2つに絞って考える



〈具体的な援助・手立て〉

① 個人向けのめくり型のイラスト手順表を作る ② 何に対して泣いているのか探り、関係性を築いていく



※作成した手順表

〈その後の様子・気づいたこと〉

① 手順表を見て、カードの意味は分かっている。「てをあらう」のカードを見て、怪我している指をさしながら「いたい、(洗うのは)いや」と言う。

代わりに、濡れたタオルで手を拭くことを提案するが、濡れたタオルを見ても提案の意味が伝わらず泣いてしまう。

→【次の行動を知らせる絵カード+その場に合わせた代替案を伝える方法】を探る必要があると気付いた。

② 話す言葉が増えてきて、自分の気持ちを簡単な日本語で伝えられるようになってきたため、泣いている理由がわかるようになってきた。

実践を通して

子どもの姿についてグループで話し合うことで、エピソードに基づいた担任とはまた違う客観的な視点から見ることができた。援助や手立てを考える際に、子どもの視点に立って『なぜ』を考えていくことで、その子の困り感を考えやすくなったと感じる。子どもについて『話し合う』ことの重要性を再確認できた。

また、対象児が絵カードを見ようとしなない姿があり、『絵カード=指示される嫌なもの』になりつつあることに気づいた。絵カードが嫌なものにならないようにするための手立てが、自分だけではなかなか浮かばなかった。そんな時、他グループの発表で、まず絵カードを使って遊び、楽しい経験と結び付けられるようにしたことを知り、新しい発想を得られた。実践するための手立てを共有して考えるだけでなく、したことも共有することの大切さに気づいた。

今回の研究会で学んだ内容を、自所でも共有して今後の保育に生かしていきたい。

1, メンバーの事例検討をサポートしたことによる気づき

- ・事例検討をするときに、グループのメンバーが話を出しやすいように進めていくことの大切さ。
- ・時間内でグループのメンバー全員が活発に意見交流できるように、話を出しやすい雰囲気づくりやいろいろな意見が出しやすいように共感や同意をすることの大切さ。
- ・話を聞いたうえで、悩んでいることや困っていることがどういふことなのかをつかみ、次へ進めるためにはどのような言葉を使ってアドバイスすることが望ましいかを考える必要性。

2, 自所での取り組み

- ・“インクルーシブ保育とは”として学んだことを伝え、子どもの姿のとらえ方の一つとして伝える。
- ・支援方法として、個人的な支援だけではなく、環境を変えていくことの大切さも伝える。
- ・クラスごとに分かれて、気になる子どもの姿を出し、「なぜ」を考え、具体的な手立ての方法を出し合う。(事例検討)
- ・職員全体に気になる子どもの姿と手立ての方法を報告する。
- ・手立てをした結果子どもがどのように変わったかを報告し合う。

3, 上記の結果や気づき

- ・子どもの姿を話すときに、保育者の考えや思いを入れずに話すことの難しさを感じ、日頃子どもの姿をとらえるときに、保育者自身で理由や原因を分析していることに気づいた。
- ・子どもの実際見えている姿をそのままとらえることや伝えることでいろいろな「なぜ」が考えられ、今まで思いつかなかった視点から子どもを見ることができるよう。
- ・手立てを考えるが、実際やってみてその手立てが合わないことがあり、やってみることで気づく、気づくことで別の手立てを考えることができる。



4, 研究会全体を通して考えたこと

- ・気になる子どもの姿を今までの経験から分析して、なぜその姿が見られるのかを考えていたが、子どもの姿を見て、子どもの立場に立って「なぜ」を考えることで、見えてくるものがある。実際の姿から「なぜ」を考えることで今まで思いつかなかった手立てが見つかることもあるため、子どもの見方を変えるために子どもの立場に立って「なぜ」を考える経験をする必要がある。
- ・グループで話をしていく時に司会、ファシリテーター役を担うことの難しさを感じ、経験することで培っていけるものもあり、今後の話し合いの場になった時に、そういう役割を自ら行う。
- ・短い時間の中でいろいろな人が発言できるように話を進めることや、発言しやすい雰囲気をどう作っていくかを考える必要があった。年齢差のある職員集団の中で、若い保育者たちも発言しやすくするために、発言に対して否定的な反応をしない、発言したことを認めていく職員集団を作っていく必要がある。

1. メンバーの事例検討をサポートしたことによる気付き

- ・事例検討をしていく中で、傾聴することの大切さに気付いた。
- ・初めて会う相手でも、話がしやすくなるような雰囲気作りの大切さを感じた。
- ・話を聞いていく中で、話をまとめていき、さらに話を深めていく難しさを感じた。

2. 自園での取り組み(インクルーシブ保育に向かう風土を作る方法を考え、実践したこと)

- ・若手や中堅、ベテランと色々な世代の保育者がいる中で、休憩室で色々な人と保育の話をはじめ、プライベートの話など、気張らず話をし、関係を深めていった。
- ・保育現場では、職種の違う給食室の先生やナースとも連携を取りながら、クラス運営、保育所全体が運営しやすいよう日頃からコミュニケーションを図るよう努めた。
- ・クラスの中で、子ども達の姿を共有し、どういった支援や配慮が必要かなど話し合う機会を常々設けた。
- ・子ども達の興味や関心をもっていることに目を向け、どのように保育を進めていくのか、子ども達の主体性も大事にしながら話し合い、取り組んできた。

3. 1と2の結果や気付き

- ・事例検討をサポートしていく中で、回を重ねていくごとに意見を出し合いやすくなり、話し合いがしやすくなった。→コミュニケーションを常日頃からとることの大切さに改めて気付いた。
- ・話をしていく中で、その人の人柄や話し方なども少しずつわかった。→どのように話を聞いたり、質問をしたりしていけばよいかを考えるようになった。
- ・子どもの立場、目線になって考えることで、子どもの理解が深まった。→保育者としてこうだろうと決めつけている部分があったことに気付いた。
- ・子どもの支援のありかたについて、その子への個別な支援だけでなく、クラス全体での支援や環境を変えるなど改めて考える時間になった。→色々な方法を考え支援をしていくことで、その子だけでなく、クラス全体が過ごしやすいことにもつながると気付いた。

4. 研究会全体を通して考えたこと

インクルーシブ研究会に参加させていただき、改めて子どものことをよく観察し、強みや弱みを知り、その子の目線に立って「なぜ？」について考えることが大切だと思った。そうすることで、どのような援助や手立てが必要かを考えることができ、その援助をすることで、クラスの中で対象児以外の困っている子ども達にも有効な手立てになることにも気付き、学びになった。グループで事例を検討し、話を進めていく中で、色々な意見や考えを出し合うことで、自分一人では考えつかない視点を知ることができたり、手立てもあらゆる方向から意見がでたりしたことで、自分の中で、固定された考えや思い込みがあることに気付いた。改めて、日頃からクラス担任間はもちろんのこと、保育所全体で子どものことや保育のことなど、みんなで話し合うことの大切さを感じた。また、子どもだけでなく子どもをとりまく人的環境、物的環境も状況に合わせて柔軟に変化していけるよう常日頃から職員間のコミュニケーションをとっていくことも必要であると学んだ。子どもや大人に限らず、柔軟に相手の話に耳を傾け、話ができる保育者でありたいと思った。

(概要)

年中、年長クラス(30人程度)は同じ保育室で朝と夕方に室内遊びを一緒に行っている。
各コーナー遊ぶ人数が決まっている。遊ぶ際は人数が分かるように明示したボードに自分のマグネットを貼っている。子どもたちは自分の名前を書いたマグネットを遊ぶ所に貼っている。(右図)

子どもの姿



- ・5歳児の男の子
- ・レゴブロックや折り紙等、自分で創造して作る遊びが好き
- ・遊びに対し人数が決まっていることは分かっているが納得するのに時間を要する
- 玩具が変わってくれないと泣くことが多い
- ・言葉の発達がゆっくりで認知の発達が2歳児くらい



ラキューで遊ぶ時の例
図ではマグネット1つ貼っており1人が遊んでいる。
3人分空いている(あと3人遊べる)状態である。

(気になる姿)

玩具が変わってくれないと泣くことが多い

(なぜ?)

- ①気持ちが落ち着かない
- ひまだな…
- ②あそびたいのに…

思い

(具体的な援助・手立て)

- ①環境を見直す
- ②2人席の机を縦向きに変えて4人席にすることで人数を増やす。

(その後の様子)

・年長・年中の保育室にそれぞれ机上遊びの玩具やカードゲームを置いていたがそれを全て1つの棚にまとめた。

→1つにまとめたことで選びやすくなり「どれにする？」と友達と一緒に選んで遊んでいる。座ってじっくり遊ぶ時間が増えたので保育室が落ち着いている。

・人気のある折り紙コーナーは机の向きを変えて2人から4人に、レゴブロックコーナーはブロックの量を増やして3人から4人に変更した。

→遊びを選ぶゆとりが生まれた。完全にトラブルがなくなったわけではないが減った。



折り紙コーナー



(研究会を通じた考察)

- ・グループ全体で1人の「なぜ？」を考えることで新しい発見があり、客観的に考察することができた。話をしていると「〇〇だから」と自分の主観で話してしまいがちになったので初めは難しく感じた。
- ・さまざまな支援の方法がある中で正解はなく、同じ支援でも対象児の合う、合わないがあると考え。その子に合うものを探し他の職員にも一緒に「なぜ？」を考えてもらうのも1つの手段として試行錯誤しながら今後も保育をしていきたい。

インクルーシブ保育研究会

☆メンバーの事例検討をサポートしたことによる気付き☆

- ・保育環境や経験年数が異なる中でも子どもの気になる姿と真摯に向き合い、どの様にアプローチしていけば良いかに悩む姿は皆同じだと感じた。事例検討をする事で自身の考えと異なる新たな気付きを得ることができた。
- ・ファシリテーターとして述べる自身の言葉がそのままグループ内の意見へと繋がってしまう為、Bグループの保育者の意見を引き出せる傾聴力が必要である。
- ・この姿には、この様な援助をしてきたという固定概念を持っていたが、Bグループの保育者の意見を聞き、自身と異なる視点があることに気づいた。
- ・Bグループの保育者と中堅職員が付箋を用いて自身の意見を出し合うことで、Bグループの保育者の思いや意見が反映される点がとても良いと感じた。

☆自所での取り組み☆

- ・研究会の内容を職員全体に周知し、1～3年目の職員に事例を提供してもらい、検討を行なった。

【子どもの姿】

😊3歳児★さん

- ・友だちの動きが気になる。視野が広い。
- ・配慮児を気に掛ける姿がある
- ・自身が遊べていない時やクラス内が騒がしくなっている時に特定の女の子の友だちに嫌なことを言う
- ・面倒見がよい

【気になる姿】

友だちに嫌なことを言う

【なぜ】

- ①かまってほしい
- ②友だちの誘い方がわからない

【手だて】

- ① 嬉しい言葉(言われて嫌な気持ちになる言葉)を見つける。言われて嬉しい言葉を使っている時の姿を認めていく。
- ② 友だちと遊びたい時の誘い方を一緒に考え、一緒に誘っていく。(あそぼうよカードを使用してみる)

【その後の様子、気付いたこと】

- ・手立てをクラス内で共有し、本格的に実践を試みる前に「★さん」自身の姿が少しずつ変わり始め、嫌な言葉を言わなくなり、「あそぼう」と友だちを誘う姿が見られるようになった。その一方で、保育者をチラッと見ながらわざと大きな声を出し自分をアピールする新たな気になる姿が見られ始めた為、再度事例検討を用いて「なぜ」と「手立て」を模索していきたいと考えている。
- ・事例検討を通して、手立て以外にも「★さん」と2人の時間を作ることが必要と考え、意識して2人の時間を設けるようにしたことで「★さん」の良い所をたくさん認めてあげられる機会を作ることができた為、引き続き2人の時間を大切にしていきたい。

【事例検討参加者(1～3年目の職員)の感想】

- ・気になる姿を複数名で検討することで自分と違う意見を知ることができ勉強になった。
- ・事例検討者に対する質問を通して、他クラスの子どもの姿や保育のすすめ方をより理解することができた。
- ・気になる姿を複数名で検討することで参考になることがたくさんあり今後も事例検討を活用していきたい。



☆自所での取り組みを通して気付いたこと☆

- ・研究会の間ではお互いに様子を伺い遠慮がちな検討になってしまっていたが、普段からコミュニケーションをとっている職員との検討は各々が自身の思いを声に出し、自身と異なる意見を認め合いながら深く検討し合う場となった。
- ・事例検討を通して、若手の保育者は色々な意見を取り入れ、保育の向上を目指していることが伝わり、自身も見習わなければならないと感じた。
- ・自身の「この時はこうすれば良いのでは??」といった固定概念と異なる意見にこそ新たな気付きが見られる為、同じ方向をむいて保育をしているクラス内の職員とは別のメンバーで検討することが望ましい。
- ・在所している子どもの一人として、「★さん」のおおまかな性格は知っていたが、事例検討を行なう中で「★さん」の強みについて知ることができ、自身のクラス以外の子どもたちの強みにもアンテナを張っていかなければならないと気付いた。

☆研究会全体を通して考えたこと☆

研究会を通して、固定概念を崩すことで新たな考えや気付きに出会い、その気付きがさらなる気付きに繋がっていくことを学びました。自身の凝り固まった考えがある一方でBグループの保育者の意見が心にささる瞬間があり、普段の保育でも“〇歳児だからこうあるべき”と考えるのではなく、目の前の子ども達にとってより良い環境、必要な援助を行なう保育を目指そうと意識改革することが出来ました。

インクルーシブ保育を実践するには、今までの固定概念を崩し、多様な考え方を取り入れ、子ども達にとってより良い環境の中、子ども達を包み込み、必要な援助を続けていくことが大切であり、その為には、固定概念にとらわれない年長者の柔軟性と、若手の保育者の意見が反映される風通しの良い職場環境が必要だと感じました。

3歳児クラス 男児

- ・子ども20名 担任2名
- ・外国籍で、療育手帳を取得している
- ・室内ではブロック、パズルなどの組み立てる遊びが好き
- ・体を動かすことが好きで所庭では友達とおいかけっこなどを行っている
- ・言葉でのやりとりが難しく、保育者はジェスチャーや表情でやり取りを行う



気になる姿

表情やジェスチャーのやりとりが楽しくなると注意や声掛けに意識が向かなくなり、危ないことを伝えた時にも笑って繰り返す。



なぜ？

触れ合いや、やりとりが楽しい。

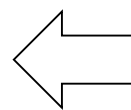


その後の様子・気づいたこと

援助・手立てを立てた後の対象児の姿が変わり、危険な行動は保育者と目が合うと自分で気が付いてやめるようになった。

また、簡単な言葉でのやり取りが出来たり、自分の思いを自ら保育者に伝えたりしてくれるような言葉や行動がよく見られるようになってきた。

そのため、次のステップとして、現在は支援カードを見て、次に自分のすることが分かるように援助することで生活の流れを身に付けていけるようにしている。支援カードにはイラストよりもトイレの便座や、本人の私物など実際の写真が効果的に伝わっている。



具体的な援助・手だて

よいときの表情や態度を大げさにすることでダメなときとの差別化をはかる。

日常の関わりの中で肯定的な関わりや楽しい経験を一緒に繰り返していく。その中で良い時の表情やジェスチャーなどの関わりを大げさにすることで、良くない時の関わりとの違いがわかりやすくなるようにしていく。

研究会全体を通した考察

講義を聞きグループでの話し合いを重ねるたびに、私自身が子どもの姿や困り感を読み取ろうとする際に、たくさんのおもひ込みや決めつけを無意識に行っていることに気付くことが出来た。

話し合いでは、似ている考えや少し違う考え、自分には無かった考えと様々であった。しかし、そこにこそグループワークの意味があり、それぞれ違う考えをもとに保育の実践、振り返りを繰り返す過程が大切なのだと思える。

3・4・5歳児（異年齢保育）

園児24名

担任2名+フリー職員1名



5歳児 Gくん

- ・身体を動かして遊ぶことが好き。友達を誘って、ルールのある遊びをするが、少し強引な時がある。
- ・口調が強く、態度が大きい一面がある。
- ・何か気に入らないことがあると自分の気持ちに素直になれず、友達にも保育者にも思いを伝えることが出来ないことがある。
- ・年の離れた年下の子（乳児）に対しては、優しく接し、よく面倒を見てくれている。

〈気になる姿〉

- ・大人に対して、気に入らないことを言われると、又は気に入らないことがあると、口調が強くなり、叩く・蹴るなどの行為が見られる。（人を見て、「する先生」「しない先生」がいる）

〈なぜ？〉

- ①ぼくの方が先生よりも強い！（大人同士の上下関係を見ている？）
- ②いろいろな先生にかまってほしい

〈具体的な援助・手立て〉

- ①特定の先生と本児の関係性を深めていく。
とにかく本児といろいろな場面で関わる。
- ②本児の良いところや、本児にしてもらって助かった部分を褒め、本児が認められていることを実感できる機会を作っていく。
☆褒めるときは大きめに☆

〈その後の様子・気づき〉

- ①特定の先生と本児の関係性を深めていく。とにかく本児と様々な場面で関わる。

→3・4・5歳児の異年齢クラスなので、どうしても低学年、低月齢の子どもたちに手をかけてしまう。そのため、本児に沢山の時間を使って、関わることは難しかったが、担任間で話し合い、本児との関わりを意識するようにしている。

☆木曾先生からのアドバイス☆

「長い時間」じゃなくても「2人で5分遊ぶ」と決まった時間でも良い。

- ②本児の良いところや、本児にしてもらって助かった部分を褒め、本児が認められていることを実感できる機会を作っていく。

→縦割りのグループで当番活動をしており、いつも以上に本児に対して「〇〇ちゃん（3歳児）をみてくれてありがとう」等と感謝の気持ちを言葉で伝えると、少し照れた様子で嬉しそうにしていた。また、本児が「先生に感謝してもらいたい（褒められたい）」と思うようになったのか積極的に「これ手伝おうか？」とプラスの方向にいており、成長を感じている。

etc… 強い口調や叩く・蹴る等の姿は減った？→減っている。口調が強くなることはまだあるが、叩く・蹴る等の姿は特に減ったと感じている。「かまってほしい」という気持ちが強かったのかもかもしれない。

〈実践研究全体を通した考察〉

- ・グループに分かれて一人の子どもについて様々な意見をもらい、一人の子どものためにどうすれば楽しく保育園生活を過ごせるかを一緒に考えることができ、また自分では思いつかない子どもの気持ちだったり、具体的な援助だったり、聞くことができ勉強になった。
この実践研究を生かし、一人ひとりの子どもに合った援助や手立てを考え、実践し、子どもたちがより良く過ごせる保育園生活にしていきたいと思う。

◎子どもの姿



2歳児 男児（外国籍）

- ・体を動かすのが好きで、友達を真似て楽しく遊ぶ
- ・日本語の理解は難しいが、簡単な挨拶や先生や友達の名前を呼べるようになってきている
- ・興味があることを見つけると集中してやり続ける

気になる姿

トイレや手洗い、食事の開始を声掛けやジェスチャーがないと出来ない

◎なぜ？

- ①指示通りにしか動けないので、具体的な指示が欲しい？
- ②先生がいないのに勝手にしてもいいのかな？

◎具体的な援助・手立て



- ①ひとつひとつの動作の指示を出す

<例>トイレに行って、ズボン、パンツをおろして、便座に座って用をたして！（視覚支援カードを使用する）

- ②人員配置に余裕がある時は、保育者が個別につく

◎その後の様子・気づいたこと

- ・視覚支援カードを作成

★トイレに行く～手洗いを済ませて手を拭く

★靴下を履く・スモックを着る・帽子をかぶる

- ・絵合わせの理解を促す為に、クラス活動にカード遊びを取り入れる

例 ○楽器の写真を貼ったカードを裏返して置き、めくったカードと同じ楽器を持つ

○活動カードを裏返して置き、めくった絵の通りの行動をする

○同じ絵のカードをめくって合わせる

○同じ絵のカードをめくった子ども同士で声を掛け合いペアを作る。

➡遊びのルール理解に難しさはあるものの、カードを見ることで、内容の理解が

普段より早まり、楽しそうに遊びに参加する様子が見られた。又、クラス全体の遊びのレパートリーも広がった。カードの絵を合わせること、同じ絵をポケットに入れることを楽しみ、カードを指さし保育者の顔を見て確認しながらだが、流れを把握し自分で動いている

・石鹸の適切な量や手洗いにかかる時間など、視覚支援カードだけでは伝えられない内容は、石鹸はワンプッシュ、手洗いはゴシゴシ3回など具体的に見本を示し伝えることで、必要以上に洗い続けてしまう行動が改善されている。



◎実践研究会全体を通じた考察

この研究会に参加するまで、インクルーシブ保育のイメージは、個別支援に重点を置くことで、他の子どもたちの“できること”や活動の幅が制限されてしまうのではないかとデメリットとして捉えることが多かったが、支援の手立てを知ることで考えが大きく変わった。保育者として、適切な手立てを知る為の学びを止めてはいけなさと感じている。これまでと同じ保育のスタイルだけでは対応が難しくなる場面も増えていくことを意識し、柔軟に保育を見直していく必要がある。特性を持つ子どもが増えてきている現状を正しく把握し、それぞれの子どもの日々頑張っている姿を認め、支えていくことが、今後のインクルーシブ保育において重要であるとする。

◎メンバーの事例検討をサポートしたことによる気づき

同じ事例であっても対象児の育ってきた背景や生活環境によって支援の方法や保育士の関わり方が異なることに気づいた。子どもの背景を具体的に把握するための情報収集の難しさ、又、子どもは関わる保育者によって反応が変わるため、自身がうまくいった関わり方が、必ずしも他の保育者にも当てはまるとは限らないことを実感した。答えを示すのではなく、質問を通して考えを引き出す関わりが出来るよう今後も意識していきたい。

◎自園での取り組みとその結果や気づき

自園の研修で、インクルーシブ保育の基本的な考え方や、ユニバーサルデザインの視点から環境を整えることの大切さ、担任や管理職を含めた大人の関わり方、そして子ども理解が適切な支援の手立てにつながるということについて報告を行った。その際に、「感覚統合遊びやソーシャルスキル遊び」の文献を紹介し、すぐに園で購入してもらい、園全体に共有し日頃の保育に取り入れた。子どもの困りを見極め、明確なねらいを持つことで、クラス全体の活動の幅も広がり、苦手意識なく楽しむ子どもの姿が見られた。又、SNSを通して、保護者にも遊びで育む力についてアプローチした。これからも子どもの“気になる姿”に対して、障がいと決めつけることなく、背景や育ちを丁寧に考え、職員同士で話し合いながら理解を深め、園全体で支援の方向性を共有していく。

3歳児 男児
異年齢クラス 20名/担任2名

◎子どもの姿

- ・体を動かすことが得意で好き。
- ・正義感が強く、友達想いである。
- ・気持ちや力のコントロールが難しく、手足が出たり、強い口調で話したりすることがある。



なぜ?

- ・謝ってもらうとイライラが落ち着くから
- ・友達が悪いと思うから

◎具体的な援助・手立て

- ・コミック会話で相手とのやり取りを可視化し、相手の思いを伝えるようにする。
- ・保育者に話を聞いてもらったり、部屋を移動したり等、他のイライラを落ち着かせられる方法を探していく。
- ・相手の子どもに、「わざとじゃないけどごめんね」という言い方もあることを伝えていく。

◎気になる姿

- ・友達とのケンカや嫌なことがあった際に、「ごめんねいって」と言い言ってもらえるまで気持ちが切り替えられない。

◎その後の様子・気付いたこと

- ・本児がイライラしているときは、コミック会話で伝えることが難しかった。保育者に自分の思いを十分に受け止めてもらえると落ち着き、嫌だったことを言葉で相手に伝えることができていた。
- ・本児の中で、謝ってもらうことは相手に気持ちを受け止めてもらうことだったのだと気付いた。それ以外にも思いを受け止めてもらう方法があると気付いたことで、気になる姿はなくなってきた。
- ・また、わざとじゃないけどごめん。という言い方を、大人が日頃から使い、子どもたちに伝えていくことで、子どもも悪いことをしたから謝るという考えが弱まってきたと感じることがあった。

◎実践研究全体を通じた考察

- ・日々の保育で、子どもの気になる姿や言動の背景は、客観的に見て深堀っていくと、子ども目線の理由が見えてくるのだと実感した。また、初めは本当の理由とは違っていても、理由を想像して具体的な手立てを考え、実践することを繰り返していくことで本当の子どもの思いが見えてくるのだと学んだ。子どもの姿を客観的に見ることがとても大切で、グループワークはいろいろな意見や見方に触れられる貴重な時間であり、相方の先生や園の職員と協力してみんなで考えることがより子どもの思いを理解することに繋がると考える。

1, メンバーの事例検討をサポートしたことによる気づき

- ・事例検討をするときに、グループのメンバーが話を出しやすいように進めていくことの大切さ。
- ・時間内でグループのメンバー全員が活発に意見交流できるように、話を出しやすい雰囲気づくりやいろいろな意見が出しやすいように共感や同意をすることの大切さ。
- ・話を聞いたうえで、悩んでいることや困っていることがどういうことなのかをつかみ、次へ進めるためにはどのような言葉を使ってアドバイスすることが望ましいかを考える必要性。

2, 自所での取り組み

- ・“インクルーシブ保育とは”として学んだことを伝え、子どもの姿のとらえ方の一つとして伝える。
- ・支援方法として、個人的な支援だけではなく、環境を変えていくことの大切さも伝える。
- ・クラスごとに分かれて、気になる子どもの姿を出し、「なぜ」を考え、具体的な手立ての方法を出し合う。(事例検討)
- ・職員全体に気になる子どもの姿と手立ての方法を報告する。
- ・手立てをした結果子どもがどのように変わったかを報告し合う。

3, 上記の結果や気づき

- ・子どもの姿を話すときに、保育者の考えや思いを入れずに話すことの難しさを感じ、日頃子どもの姿をとらえるときに、保育者自身で理由や原因を分析していることに気づいた。
- ・子どもの実際見えている姿をそのままとらえることや伝えることでいろいろな「なぜ」が考えられ、今まで思いつかなかった視点から子どもを見ることができるよう。
- ・手立てを考えるが、実際やってみてその手立てが合わないことがあり、やってみることで気づく、気づくことで別の手立てを考えることができる。



4, 研究会全体を通して考えたこと

- ・気になる子どもの姿をこれまでの経験から分析して、なぜその姿が見られるのかを考えていたが、子どもの姿を見て、子どもの立場に立って「なぜ」を考えることで、見えてくるものがある。実際の姿から「なぜ」を考えることで今まで思いつかなかった手立てが見つかることもあるため、子どもの見方を変えるために子どもの立場に立って「なぜ」を考える経験をする必要がある。
- ・グループで話をしていく時に司会、ファシリテーター役を担うことの難しさを感じ、経験することで培っていけるものもあり、今後の話し合いの場になった時に、そういう役割を自ら行う。
- ・短い時間の中でいろいろな人が発言できるように話を進めることや、発言しやすい雰囲気をどう作っていくかを考える必要があった。年齢差のある職員集団の中で、若い保育者たちも発言しやすくするために、発言に対して否定的な反応をしない、発言したことを認めていく職員集団を作っていく必要がある。





メンバーの事例検討をサポートしたことによる気づき

事例検討をする中で“なぜ”考えるとき、様々な角度からの捉え方や見方があった。実は少数派の意見の中に本質が隠れていたり、気付かなかった背景や姿が見えたりすることだ。初任者が話しやすい状況だったり、中堅者の意見にとらわれずに考えを発言できたりするようにすることがわかった。また質問に対して答えの方向性があまりに違う時のサポートをどこまですべきか悩んだ。

自所での取り組み

インクルーシブ保育に向かう風土を作る方法を考え実践したこと

まず、「インクルーシブ保育ってなに？」という議題で話し合い、考え方の方向性や具体的な保育のあり方について所内研修をした。実際の例を交えながら、具体的な内容を伝え、職員にインクルーシブ保育の考え方の方向性を伝えた。

年間を通して他にもいろいろな職場内の研修を行っており、クラス間交流で、乳児幼児の担任が入れ替わり、クラスの様子を体験したり、各クラスの環境を見学し、子どもが日頃どのように遊んでいるか、工夫したことや保育者のどんな思いがあるかを発表しあったりしている。

日頃の保育を振り返りどんなことがインクルーシブ保育なのか話し合いをした。

- 視覚的なスケジュール、クールダウンスペースなどの環境整備をしていること。
- 遊びの中でも選択肢を設け、参加の仕方を自分で選べるようにすること。
- 成功体験の共有や、みんなが楽しめる環境に保育者がクラスを越えて柔軟に対応していること。

気づいたこと

- どのクラスの子の状況でも全職員で情報共有し、特定の保育者が抱え込まない体制づくりが大切であること。
- 普通の保育の中にインクルーシブ保育があるということ。
- 日頃の小さな気付きを積極的に発信・言語化することが協力し合える人間関係を作ること。
- 先輩の丁寧な関わりや視点を見て「見て感じる」ことが次の世代の成長につながる。
- 職員一人ひとりが「気付き」を積み重ね、それを共有し続けるプロセスそのものが、インクルーシブ保育の風土を作ると感じた。
- 職員全員が同じ方向を向き、それを言葉にして、発信することが私の役割だと感じた。

インクルーシブって
ちょっと難しい??

いつもやっている保育
の中にインクルーシブ
がたくさんあることに
気が付きました！

認め合うことが大切♡

研究会全体を通して
考えたこと

インクルーシブ保育の捉えは漠然としたものでスタートでしたが、研究会のメンバーと意見を出し合い、事例検討を進める中で、参加者の考えや方向性が定まってきたと思う。多様な考え方や様々な保育の方法があり、それを手立てのひとつとして実践することが大切だということ考えた。

●メンバーの事例検討をサポートしたことによる気づき

- 相手の話を整理したり、問いかけをしたりすることで正解を出すよりも考えが広がる関わりが大切だと感じた。
- 自分の価値観や経験を前提にしてしまい、知らないうちに固定観念で捉えてしまっていた。
- 話やすい雰囲気をつくると、相手が安心して意見を出しやすくなると感じた。

●これまでの研究会での気づき

- 知らない園の事例を考えるのは難しさがあったものの他の先生方の捉え方に触れることで、考え方の幅が広がった。
- 回数を重ねることでメンバー同士の中が深まり、意見交換がしやすくなった。
- インクルーシブ保育は、特別な支援だけではなく、固定観念を持たずに子どもと関わる姿勢が大切だと感じた。
- 実際には難しいが、子どもの、できる、できないで判断せずその子なりの気持ちを一歩待って受け止める視点が大切だと感じた。

●自園で実践したこと

- 年下の職員が少なく、実践という実践はできていないが些細な事でもまず相手の意見を聞くという姿勢を意識して関わる事ができた。
- 子どもたちの行動をすぐに注意や指示で受け止めるのではなく、なぜそうしたか、何を伝えようとしているのかを一度考えるよう意識するようになった。
- 保育者の都合や思い込みで判断せず、子どもの様子をよく観察しながら関わることを心掛けた。

●今後に向けて

- 特に新しい課題は現時点では感じていないが、小規模園で年下職員が少ない中でもどのように意見を引き出す場面を作っていけるのかを今後も考えていきたい。
- 他の園の事例検討をもとに、自園の子どもの姿に置き換えて考えてみるという視点を大切にしたい。
- 正解を急がず、相手の思いや考えを丁寧に聞く関わりを続けていきたい。

クラス概要

4歳児クラス:16名 1人担任



男児

- ・療育に毎週1回通っている。
- ・電車が好きで、路線や駅名を覚えている。
- ・友達が好きで、カードゲーム・ブロック遊びを楽しむ。

〈 気になる姿 〉

・並ぶときにじっとするのが難しい

〈 なぜ？ 〉

- ・体幹が弱く、じっとするのが難しい。
- ・友達に触れていると落ち着く。

〈 具体的な援助・手立て 〉

- ・段ボール等で囲われたスペースを用意し、立つ範囲を明確にする。
- ・友達以外で落ち着ける物を探し、一人で座れるようにする。

〈 その後の様子 〉

- ・芝生マットを用いて行った。10分程落ち着いて座れるようになったが、慣れてくると芝生マットで遊ぶ姿が見られ始めた。
- ・感触ボール(スクイーズ)を手に持つことで、その場にとまり並ぶことが出来るようになった。一方で、周囲の子どもが触っている様子が気になったり、玩具への興味が強くなり、保育者の話に注意を向け続けることが難しい場面が見られる。

〈 気付き 〉

- ・並ぶ場面以外でも、日本昔話を聞くなど刺激が満たされると落ち着く姿が見られた。しかし、長時間になると刺激に慣れ、落ち着くことが難しい場面も見られたので、刺激を満たす選択肢を1つだけでなく、2~3個を増やしたり、全体的に並ぶ時間を短くするなど工夫していく。

〈 実践研究会全体を通じた考察 〉

- ・この研究会を通して子どもの「気になる姿」に保育者の解釈が含まれていることに気付いた。その気付きから、解釈の含まれていない「見えている姿」で「気になる姿」を立てることが出来た。
- ・インクルーシブ保育とは、個々のニーズに応える保育だと考えていた。しかし、本研究会を通して「多様な一人」は子どもだけを指すのでは保育者も含まれているという考えに変わった。

～研究会に参加して学んだこと～

- ・研究会に参加したことで、子どもの気になる姿から「なぜ」その姿になるのかをより深く考えることのきっかけになった。なぜという理由は一つだけではなく、その場面でいくつかの要因があり、そこを追求することで新たな子どもの支援を見つけることができ、子どもにとってより良い支援をすることにつながるのだと気づくことができた。
- ・いろいろな園の先生方とのグループだったので、事例検討をするにあたり、保育者の関わり方や保育室の環境などそれぞれ違う中で話をしていき、自分の視点では、考えられなかった子どものなぜ?や援助方法を知ることができ学びになった。
- ・ファシリテーターとして、相手の意見を引き出すことの難しさに気付きました。自分の意見を伝える前に、まず相手の話を受け止めて聴く姿勢の大切さも学んだ。

～今後に向けて～



- ・これからも、皆が楽しめる感覚統合やソーシャルスキルの遊びを学び、実践し、子どもの気になる姿や困りを、職員間で共有し支援方法を検討していきたい。こうだからこうなるという固定観念にとらわれずに、他の人の意見も聞いて柔軟に取り入れていこうと思う。
- ・気になる子どもの姿に対し、固定観念の目を向けるのではなくその子どもの行動に対して癖や感覚の強弱、反射的なものであるなど様々な視点を持って支援を考える経験をすることができた。引き続き、実際の保育の中でも周囲の職員を巻き込んで子どもの“なぜ?”や支援を考えていきたい。

～講師総評～



研究会メンバーのみなさん、1年にわたる研究会への参加と各園所における実践、お疲れさまでした。最後の報告会で、お一人ずつが本研究会での学びを自分自身のことばで話してくださっている姿を見て、この1年のみなさんの学びが伝わってきました。日々の保育をしながら、研究会での学びを深めていただいたこと、心から感謝申し上げます。

今年度は初めての試みとして、保育経験年数によって2つの層に分ける形で研究会を運営してきました。実際にやってみると、むしろ私が一番助けられていたように思います。A:中堅以上クラスの方々が、各グループでの話し合いをリードしてくれたことで、どのグループも回を重ねるごとに深い議論ができるようになっていたと感じます。一方で、B:初任者クラスの方々も、それぞれが自分の意見や考えをことばにして伝えようとしてくださり、それによってA・Bという層の垣根を越えたより活発な議論につながっていました。多様な保育者が混ざり合うことのよさを改めて感じる1年でした。

何より、参加してくださったみなさんが、真摯に目の前の子どもに向き合い、子どもとの日々のやりとりも楽しみながら、自分の保育を振り返ってくださったことが、この研究会の大きな成果だと思います。子どもの姿を語るときの先生方の生き生きとした表情を見て、先生方のこうした姿勢が子どもたち、そして家族たちの支えになっていると頼もしく感じました。

「インクルーシブ保育」ということばは、少しずつ保育・幼児教育の中に浸透してきています。ですが、その意味について共通認識をもつことはまだまだ難しい状況です。インクルーシブ保育は、一人ひとり違う子どもたちに合わせて保育をつくっていく「プロセス」です。これからも共に対話する中で、すべての子どもにとってよりよい保育を一緒に考えていきましょう。

木曾 陽子